

福井県持続性の高い農業生産方式の導入に関する指針

令和元年6月

福 井 県

福井県持続性の高い農業の推進に関する指針

目 次

第1 持続性の高い農業推進の背景

第2 持続性の高い農業の生産方式について

- 1 堆肥等その他有機質資材の施用に関する技術（土づくり技術）
- 2 肥料の施用に関する技術（化学肥料低減技術）
- 3 有害動植物の防除に関する技術（化学合成農薬低減技術）

第3 持続性の高い農業導入の促進を図るための措置に関する事項（全作物共通）

- 1 土壌診断の励行
- 2 きめ細かな施肥の実施
- 3 発生予察に基づく的確な防除の実施

第4 その他必要な事項（全作物共通）

- 1 土壌の性質の総合的な改善
- 2 必要な機械、資材等及び資金の調達
- 3 関係補助事業の積極的な活用

第5 導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

（普通作物）

- 1 水 稻
- 2 大 麦
- 3 大 豆
- 4 アズキ
- 5 ナタネ
- 6 ソ バ

（野菜）

- 7 キュウリ
- 8 スイカ
- 9 メロン
- 10 カボチャ
- 11 トマト（ミディトマト含む）
- 12 ナ ス
- 13 ピーマン（シトウ含む）
- 14 イチゴ
- 15 一寸ソラマメ
- 16 スイートコーン
- 17 キャベツ
- 18 ブロッコリー（カリフラワー含む）
- 19 レタス
- 20 非結球レタス
- 21 ハクサイ
- 22 ホウレンソウ
- 23 ツマミナ
- 24 非結球アブラナ科（コマツナ・チンゲンサイ・ミズナ・サトウサイ等）
- 25 はな類（勝山ミズナ等）

- 26 カブ
 - 27 ダイコン
 - 28 ニンジン
 - 29 カンショ
 - 30 サトイモ
 - 31 サトイモ葉柄 (ハッ頭)
 - 32 バレイショ
 - 33 タマネギ
 - 34 ネギ
 - 35 ニンニク
 - 36 ラッキョウ
 - 37 ウリ類
 - 38 シュンギク
 - 39 シソ
 - 40 ゴボウ
 - 41 ジネンジョ
 - 42 未成熟インゲン
 - 43 エダマメ
 - 44 未成熟エンドウ
 - 45 オクラ
 - 46 食用ギク
 - 47 アスパラガス
 - 48 モロヘイヤ
 - 49 ツルムラサキ
 - 50 パプリカ
 - 51 ズッキーニ
 - 52 パセリ
 - 53 バジル
 - 54 ヤーコン
 - 55 ショウガ
 - 56 エンサイ (空芯菜)
- (果樹)
- 57 ウメ (アズキ含む)
 - 58 ナシ
 - 59 カキ
 - 60 クリ
 - 61 ブドウ
 - 62 ミカン類
 - 63 モモ (ネクタリン含む)
 - 64 リンゴ
 - 65 イチジク
 - 66 イチヨウ
 - 67 キウイフルーツ
 - 68 スモモ (プルーン含む)
 - 69 ベリー類 (ブルーベリー等)

(花き)

- 70 キク
- 71 ユリ
- 72 スイセン
- 73 ストック
- 74 トルコギキョウ
- 75 カーネーション
- 76 宿根カスミソウ
- 77 デルフィニウム
- 78 ラークスパー
- 79 ウメモドキ
- 80 ソケイ
- 81 ボケ
- 82 スターチス類
- 83 アスター
- 84 キンギョソウ
- 85 コスモス
- 86 ヒマワリ
- 87 シロクジャク
- 88 シャクヤク
- 89 リヤトリス
- 90 チューリップ
- 91 フリージア
- 92 グラジオラス
- 93 カラー
- 94 アリウム・ギガンチウム
- 95 サクラ
- 96 サンゴミズキ
- 97 レンギョウ
- 98 ヤナギ類
- 99 グニーユーカリ
- 100 コデマリ
- 101 ナルコユリ
- 102 花ハス

(その他)

- 103 茶
- 104 飼料用イネ
- 105 マコモタケ
- 106 杜仲茶
- 107 エゴマ (子実)

第6 導入計画の認定

第7 農業改良資金融通法の特例措置

第8 その他

第1 持続性の高い農業推進の基本方針

1 持続性の高い農業推進の背景

近年、環境に対する国民の関心が高まるなかで、農業生産活動に伴う環境負荷の軽減や、農業を通じた環境の維持・向上が求められている。また、化学肥料や農薬の使用を控えた農産物等に対する消費者・実需者のニーズも高まってきている。

今後、農業が有する自然循環機能等を生かしながら、将来にわたってその多様な機能を発揮していくためには、農地の生産力の維持増進のための土づくりを十分に行うとともに、化学肥料や農薬の使用を低減した農作物の栽培が求められている。

このような状況に対応するため、本県では、「農業の持つ物質循環機能を生かし、生産性との調和に配慮しつつ、土づくり等を通じて化学肥料・農薬の使用等による環境負荷の軽減に配慮した持続的な農業」である環境調和型農業（環境にやさしい農業）の推進に努めてきた。

平成11年度に、環境と調和のとれた持続的な農業生産の推進を図るため、堆肥等を活用した土づくりと化学肥料・化学農薬の使用の低減を一体的に行う「持続性の高い農業生産方式」の普及浸透を図り、それに取り組む農業者に対する支援措置を内容とした「持続性の高い農業生産方式の導入の促進に関する法律」（以下「法律」という。）が施行されたが、今般、同法律の施行規則の改正を受け、同法律の施行について、一部改正された。

本改正を受け、本県の農業者が導入すべき農業生産方式を具体的に示すため、同法律第3条に基づき「福井県持続性の高い農業生産方式導入指針」（以下「導入指針」という。）を改定する。なお、本導入指針は農業者が法律に基づく支援措置の対象となるために必要な「持続性の高い農業生産方式の導入に関する計画」（以下「導入計画」という。）の作成および認定の前提となるものである。

第2 持続性の高い農業生産方式について

本法律に基づく支援の対象となる「持続性の高い農業生産方式」とは、土壌の性質に由来する農地の生産力の維持増進その他良好な営農環境の確保に資すると認められる合理的な農業の生産方式であって以下の1～3の技術をいい、これらすべてを用いて行われるものである。

なお、この生産方式は、その生産物の質や量の水準を従来の生産方式の水準から低下させるようなものではなく、かつ、経営的にみて持続可能であり、将来にわたって農業生産を持続的に行うことができるものである。

1 堆肥等その他の有機質資材の施用に関する技術であって、土壌の性質を改善する効果の高いもの

(1) 堆肥等有機質資材施用技術

土壌診断（可給態窒素含有量および土壌有機物含量を含む土壌の性質の調査・分析）を行い、その結果に基づき、堆肥等その他の有機物資材であって炭素窒素比（C/N比）がおおむね10から150の範囲にあるものを農地に施用する技術をいう。

堆肥等有機質資材の範囲としては、堆肥のほか、稲わら、麦わら、作物残さ等が含まれるものと考えられるが、樹皮（バーク）およびオガクズについては、炭素窒素比が大きく、作物の生育に障害を与えるおそれがあるので含まれない。

また、施用する種類や量については、土壌診断の結果に基づく適正なものと考えられるものとし、過剰な施用や未熟な堆肥の施用により、作物の生育を悪化させ、又は地下水の汚染等環境に負荷を与えることのないよう留意する必要がある。

(2) 緑肥作物利用技術

土壌診断（可給態窒素含有量および土壌有機物含有量を含む土壌の性質の調査・分析）を行い、その結果に基づき、緑肥作物（農地に有機物や養分を供給するために栽培される作物）を栽培して、農地にすき込む技術をいう。

緑肥作物の種類は限定しないものの、有機物や養分に富み、農地にすき込むものであり、地域に適合したものを選択することが必要である。

また、本技術の導入に併せて合理的な輪作体系の確立を図ることが望ましい。

なお、選択した緑肥作物の種類によっては、対抗植物としての効果を有するものがあり、この場合は、法第2条第3号の技術である「対抗植物利用技術」を同時に導入しているものとみなす。

2 肥料の施用に関する技術であって、化学的に合成された肥料の施用を減少させる効果が高い技術

(1) 局所施肥技術

肥料を作物の根の周辺に局所的に施用する技術をいい、水稻作における側条施肥もこれに含まれる。

本技術の導入においては、肥料による作物への濃度障害を回避する観点から、農作物の種類、肥料の種類等に応じて施肥する位置等を調整する必要がある。

また、労働時間の軽減を図る観点から、側条施肥田植機や畝立マルチ施肥機等局所施肥と同時に他の生産行程を行う農業機械を積極的かつ効率的に利用することが望ましい。

(2) 肥効調節型肥料施用技術

本技術は、普通肥料のうち、いわゆる被覆肥料、化学合成緩効性肥料及び硝酸化成抑制剤入り肥料を施用する技術をいう。

本技術の導入においては、これらの肥効調節型肥料の種類により肥効パターンが異なることを十分考慮し、農作物の種類、土壌条件及び気象条件に応じて肥料の種類を選択する必要がある。

(3) 有機質肥料施用技術

有機質（動植物質のものに限る。）を原料として使用する肥料を施用する技術をいう。

施用する種類や量については、土壌診断の結果、農作物の種類、含有する肥料成分量等を勘案して適正と考えられるものとし、過剰な施用や未熟な堆肥の施用により、作物の生育や品質を悪化させ、又は環境に著しい負荷を与えることのないよう留意する必要がある。

なお、本技術で利用される肥料には、いわゆる有機入り化成肥料も含まれるが、上記の二つの技術が、化学肥料の使用を3割程度低減することが可能であることを考慮すれば、有機質由来のものが原料ベースで3割以上含まれているものを使用することが望ましい。

3 有害動植物の防除に関する技術であって、化学的に合成された農薬の使用を減少させる効果が高いもの

(1) 温湯種子消毒技術

種子を温湯に浸漬することにより、当該種子に付着した有害動植物を駆除する技術をいう。

本技術の導入においては、浸漬する温度や時間により防除効果や発芽率等が変動することから、適切な条件の下で行うことが必要である。

(2) 機械除草技術

有害植物(有害動物の発生を助長する植物を含む。)を機械的方法により駆除する技術をいう。

本技術の導入においては、除草用機械による除草を効率的に行えるよう、農作物の栽植様式の調節やほ場の規模に応じた機械の種類を選択を行うことが必要である。

なお、本技術には、畦畔における有害動物の発生を助長する植物を機械的方法により駆除する技術が含まれる。

(3) 除草用動物利用技術

有害植物を駆除するための小動物の農地における放し飼いを行う技術をいう。

具体的には、アイガモ又はコイを利用した水稻作が想定されるが、このほか、都道府県農業試験場等で駆除効果が明らかとされた小動物を利用するものも含まれる。

本技術の導入においては、除草用動物が野犬等の外敵の被害を受けないよう、柵等で保護するなど適切な条件で行うことが必要である。

(4) 生物農薬利用技術

農薬取締法（昭和23年法律第82号）第2条第2項の天敵であって、同法第3条第1項又は第34条第1項の登録を受けたものを利用する技術をいい、捕食性昆虫、寄生性昆虫のほか、拮抗細菌、拮抗糸状菌等を導入する技術及びバンカー植物（天敵の増殖又は密度の維持に資する植物をいう。）を栽培する技術等が含まれる。

本技術の導入においては、害虫の発生密度や施設内の温度湿度等により防除効果変動することから、適切な条件の下で行うことが必要である。

(5) 対抗植物利用技術

土壌中の有害動植物を駆除し、又はそのまん延を防止する効果を有する植物を栽培する技術をいう。

対抗植物の種類は限定しないものの、都道府県農業試験場等で防除効果が明らかにされ、地域の特性に適合したものを選択することが必要である。

また、本技術の導入においては、対抗植物の防除効果は特異性が高いことから、防除対象とする線虫等有害動植物の種類に応じて、その種類を選択することが必要であるとともに、合理的な輪作体系の確立を図ることが望ましい。

なお、対抗植物には、有害動植物を駆除し、又はそのまん延を防止する植物のみでなく、有害動植物の土壌中における密度を下げる等の効果が期待される非寄生植物も含まれる。

(6) 抵抗性品種栽培・台木利用技術

有害動植物に対して抵抗性を持つ品種に属する農作物を栽培し、又は当該農作物を台木として利用する技術をいう。

抵抗性品種・台木の種類は限定しないものの、都道府県農業試験場等で防除効果が明らかにされ、防除対象とする有害動植物の種類や地域の特性に適合したものを選択することが必要である。

(7) 土壌還元消毒技術

土壌中の酸素の濃度を低下させることにより、土壌中の有害動植物を駆除する技術をいう。

具体的には、畑において、有機物を施用するとともに、土壌中の水分を十分高めた上で、資材により被覆した状態を継続する技術のほか、都道府県農業試験場等で防除効果が明らかにされた技術が含まれる。

なお、土壌を被覆する資材については、適正に処理せずに廃棄すると、大気汚染等の環境負荷を与える恐れがある資材もあることから、使用後の処理が適正に行われるよう指導する必要がある。また、施用する有機物については、肥料成分を含有していることから、過剰な施肥につながらないように留意する必要がある。

(8) 熱利用土壌消毒技術

土壌に熱を加えてその温度を上昇させることにより、土壌中の有害動植物を駆除する技術をいう。

具体的には、太陽熱土壌消毒技術、熱水土壌消毒技術及び蒸気土壌消毒技術である。

本技術の導入においては、気候条件や土壌条件等により防除効果が変動することから、地域の特性に適合したものを選択することが必要である。

なお、土壌に熱を加える前にその表面を資材で被覆する場合については、適正に処理せずに廃棄すると、大気汚染等を引き起こす恐れがある資材もあることから、その使用後の処理が適正に行われるよう指導する必要がある。

(9) 光利用技術

有害動植物を駆除し、又はそのまん延を防止するため、有害動植物を誘引し、若しくは忌避させ、又はその生理的機能を抑制する効果を有する光を利用する技術をいう。

具体的には、シルバーフィルム等の反射資材、粘着資材、非散布型農薬含有テープ、黄色灯及び紫外線除去フィルムを利用する技術である。

なお、粘着資材の利用と生物農薬利用技術を組み合わせて行う場合は、粘着資材で天敵を捕殺しないよう注意する必要がある。

(10) 被覆栽培技術

農作物を有害動植物の付着を防止するための資材で被覆する技術をいう。

具体的には、べたかけ栽培技術、雨よけ栽培技術、トンネル栽培技術、袋かけ栽培技術、防虫ネットによる被覆栽培技術等である。

本技術の導入において、有害動植物による被害を予防する観点から、最適な被覆資材の選択、被覆状態の維持を行うことが必要である。

なお、本技術に用いられる資材は、適正に処理せずに廃棄すると、大気汚染等を引き起こす恐れがある資材もあることから、使用後の処理が適正に行われるよう指導する必要がある。

(11) フェロモン剤利用技術

農作物を害する昆虫のフェロモン作用を有する物質を有効成分とする薬剤であって、農薬取締法第3条第1項又は第34条第1項の登録を受けたものを利用する技術をいう。

本技術の導入において、害虫の発生密度やほ場の規模等により防除効果が変動することから、適切な条件で行うことが必要であるとともに、併せて発生予察を行うことが望ましい。

(12) マルチ栽培技術

土壌の表面を有害動植物のまん延を防止するための資材で被覆する技術をいう。

本技術の導入においては、まん延防止効果を維持する観点から、最適な被覆資材の選択、被覆状態の維持を行うことが必要である。

また、本技術には、わら類、被覆植物によるマルチ栽培技術、畦畔への抑草ネットおよび被覆植物の設置も含まれる。

なお、本技術に用いられる資材は、適正に処理せずに廃棄すると、大気汚染等を引き起こす恐れがある資材もあることから、使用後の処理が適正に行われるよう指導する必要がある。

第3 持続性の高い農業生産の導入の促進を図るための措置に関する事項（全作物共通）

1 土壌診断の励行

適切な施肥を行うためには、土壌診断を実施し、その結果に基づいて各資材の施用量を設定することが必要である。

このため、持続性の高い農業生産方式の導入に当たっては、県下7カ所の各農林総合事務所・嶺南振興局やJA経済連の土壌診断センター等の分析診断機器の積極的な活用を図るとともに、施肥量の決定等に関し、普及指導員等から診断結果をふまえたアドバイスを受け、土壌の改善と施肥の合理化に努めることとする。

2 きめ細かな施肥の実施

局所施肥を的確に実施するためには、土壌の物理性の確保、農作物の栽植様式に合わせた施肥機による肥料繰り出し量の調節等が技術的に重要な要素となる。

また、肥効調節型肥料の利用に当たっては、肥効発現の速度の程度が異なるものが多数流通しているため、栽培する農作物の吸肥特性に合致した肥料の適切な選択が行われる必要がある。

県農林水産部では、適切な肥料の利用のための資料として、これまでに「施肥の手引き」を策定している。また、農業試験場、園芸試験場や各農林総合事務所・嶺南振興局等で試験等を実施しているため、持続性の高い農業生産方式を導入しようとする農業者は、最寄りの各農林総合事務所・嶺南振興局、農協等を通じてこれらの情報を活用することが必要である。

3 発生予察に基づく的確な防除の実施

病害虫による農作物の被害を防ぐためには、病害虫の発生時期、発生量を予測し、適期に防除することが重要である。

病害虫の発生は、気象条件、施設内の環境条件、作物の生育状態、品種、施肥、作期、作型、前作物および作付体系などに左右されるため、気象予報に留意するとともに、地域や圃場ごとに病害虫の発生状況を定期的に調査、把握して発生を予測することが必要である。

農業試験場病害虫防除室による発生予察情報等を参考にするとともに、地域、個別圃場等においてもフェロモントラップや予察灯を設置するなどし、きめ細かな発生予察に基づく適切な防除法によって効率的に防除を実施する。

第4 その他必要な事項（全作物共通）

1 土壌の性質の総合的な改善

堆肥等有機質資材の施用は、土壌の性質の総合的な改善を行う最も有効な手法であるとされているが、土壌の物理性の根本的な改善や塩基組成の適正化のためには、たい肥の施用だけで不十分な場合もあり、これが適切に行われない場合は持続性の高い農業生産方式の効果的な実施に困難を来すことも想定される。

このため、水田転換の畑地や園地では、暗きよの施工等による排水促進を、また施設栽培の野菜や花きでは、土壌診断による塩基組成の改善を行うこととする。

2 必要な機械、資材等及び資金の調達

持続性の高い農業生産方式の導入には、新たな農業機械や資材等の整備が必要となることがある。これらの機械・資材は、慣行のものと比較して、高価であるだけでなく、その利用に関しても高度な技術が要求されるものであることから、個々の農業者の経営内容や技術水準を見極めつつ、導入を行うことが必要である。

また、これらの農業機械、資材等を整備する場合には、取組みの初期段階における経営的な負担の軽減を図る観点から、必要に応じ、農業改良資金その他の融資制度を積極的に活用することが適当である。

3 関係補助事業の積極的な活用

持続性の高い農業生産方式に地域全体で取り組む場合には、各農林総合事務所・嶺南振興局の普及指導員による濃密指導や実証ほの設置等による技術の確立、たい肥舎等共同利用施設の建設による生産条件の整備等を推進することが重要となることから、これらを総合的に実施するため、必要に応じ、関係補助事業を積極的に活用することが適当である。

第5 作物ごとの持続性の高い農業生産方式の内容

(普通作物)

1 水稲

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

高志丹南平坦地域は、九頭竜川および日野川の沖積地帯で、丹生山地、南条山地、越前中央山地および加賀越前山地に囲まれた平坦な地域である。土壌は半湿田～湿田タイプ土の粘質土壌で、全般に肥沃な水田が多く分布している。

高志丹南中山間地域は、九頭竜川と日野川およびその支流の流域にあたる中山間地帯で、土壌は、壤質～粘質の乾田～半湿田タイプで、礫質土壌の分布もみられ、水稲の生産力は中庸～やや低い。

坂井地域は、県北部に位置し、九頭竜川の下流域に広がる平坦な沖積水田地帯である。土壌は、全般に肥沃な半湿田タイプの粘質土壌が多く分布し、全般に水稲の生産力の高い水田が多い。

奥越地域は、九頭竜川の上流域にあたり、西は越前中央山地、南は美濃越前山地、北西部は加賀越前山地に囲まれた大野勝山盆地に位置する。土壌は、全般に壤質の礫質土壌が多く、また、黒ボク混じりの土壌も分布している。

嶺南地域は、県の南西部に位置し、地形的に大きい平野や河川がほとんどない。土壌は、養分含量が少ない礫質や中粗粒質の土壌が広く分布し、水稲の生産力は全般に低い。

このことから、生産方式の内容は、

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・土壌診断に基づき、稲わらたい肥等有機質資材を施用する。 ・稲わらや堆肥などの有機質資材を鋤き込む場合には、土中における腐熟化を促進するため、早期秋起こしを実施する。 ○レンゲ等緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。鋤込み量に応じた基肥削減や適切な水管理など緑肥の適正利用を行う。 	<p>1 t / 1 0 a 周年作では年1回の施用とする</p> <p>全量鋤き込み</p>
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥技術（側条施肥技術） ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○温湯種子消毒 ○機械除草技術 <ul style="list-style-type: none"> ・水田雑草を中耕除草機や畝間除草機等により除草する。 ・畦畔雑草を機械的に除草する。 ○除草用動物利用技術 ○生物農薬利用技術 ○マルチ栽培技術 	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・長期残効型殺虫殺菌剤の育苗箱施薬は効率的である。 ・使用の目安を越えて施用する堆きゅう肥の施用量に応じて、基肥の窒素量を減らす。 	

2 大麦

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等を施用する。 ○土壌診断に基づき、稲ワラの全量還元を行い、水稻収穫後麦播種前に土壌とよく混和する。 ○レンゲ等緑肥作物利用技術 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。鋤込み量に応じた基肥削減や適切な水管理など緑肥の適正利用を行う。 	2 t / 1 0 a 周年作では年1回の施用とする 全量鋤き込み 全量鋤き込み
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○温湯種子消毒 ○機械除草技術 ○マルチ栽培技術 	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・機械除草技術はオートカルチ等で2～3回行う。 	

3 大豆

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等を施用する。 ○土壌診断に基づき、稲ワラの全量還元を行い、水稻収穫後麦播種前に土壌とよく混和する。 ○レンゲ等緑肥作物利用技術 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。鋤込み量に応じた基肥削減や適切な水管理など緑肥の適正利用を行う。 	2 t / 1 0 a 周年作では年1回の施用とする 全量鋤き込み 全量鋤き込み
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術 ○生物農薬利用技術 ○フェロモン剤利用技術 ○マルチ栽培技術 	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・機械除草技術はオートカルチ等で2～3回行う。 	

4 アズキ

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等を施用する。 ○土壌診断に基づき、稲ワラの全量還元を行い、水稻収穫後麦播種前に土壌とよく混和する。 ○レンゲ等緑肥作物利用技術 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。鋤込み量に応じた基肥削減や適切な水管理など緑肥の適正利用を行う。 	2 t / 1 0 a 周年作では年1回の施用とする 全量鋤き込み 全量鋤き込み
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥技術 ○有機質肥料施用技術 	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術 ○生物農薬利用技術 ○フェロモン剤利用技術 ○熱利用土壌消毒技術 <ul style="list-style-type: none"> ・熱水土壌消毒技術及び蒸気土壌消毒技術 ・太陽熱土壌消毒技術 ○被覆栽培技術 ○マルチ栽培技術 	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 	

5 ナタネ

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術 	2 t / 1 0 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○有機質肥料施用技術 	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術 ○マルチ栽培技術 	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥の成分を換算して施肥設計する。 ・輪作を行う。 	

6 ソバ

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等を施用する。 ○稲ワラ・麦秆等の鋤込み	2 t / 1 0 a 周年作では年1回の施用とする 全量鋤き込み
化学肥料低減技術	○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 2 0 %
化学農薬低減技術	○機械除草技術 ○生物農薬利用技術 ○フェロモン剤利用技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 2 0 %
その他の留意事項	・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。	

(野菜)

7 キュウリ

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	2 t / 1 0 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 2 0 %
化学農薬低減技術	○生物農薬利用技術 ○対抗植物利用技術 ○抵抗性品種栽培・台木利用技術 ○熱利用土壌消毒技術 ・熱水土壌消毒技術及び蒸気土壌消毒技術 ・太陽熱土壌消毒技術 ○光利用技術 ・粘着資材 ・非散布型農薬含有テープ ・シルバーフィルム等の反射資材 ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 2 0 %
その他の留意事項	・堆きゅう肥の成分を換算して施肥設計する。 ・輪作を行う。	

8 スイカ

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	2t/10a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	○対抗植物利用技術 ○抵抗性品種栽培・台木利用技術 ○熱利用土壌消毒技術 ・熱水土壌消毒技術及び蒸気土壌消毒技術 ・太陽熱土壌消毒技術 ○光利用技術 ・粘着資材 ・シルバーフィルム等の反射資材 ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥の成分を換算して施肥設計する。 ・輪作を行う。 	

9 メロン

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	2t/10a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	○生物農薬利用技術 ○対抗植物利用技術 ○抵抗性品種栽培・台木利用技術 ○土壌還元消毒技術 ○熱利用土壌消毒技術 ・熱水土壌消毒技術及び蒸気土壌消毒技術 ・太陽熱土壌消毒技術 ○光利用技術 ・粘着資材 ・非散布型農薬含有テープ ・シルバーフィルム等の反射資材 ○被覆栽培技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥の成分を換算して施肥設計する。 ・輪作を行う。 	

10 カボチャ

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	2t/10a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	○生物農薬利用技術 ○対抗植物利用技術 ○抵抗性品種栽培・台木利用技術 ○熱利用土壌消毒技術 ・熱水土壌消毒技術及び蒸気土壌消毒技術 ・太陽熱土壌消毒技術 ○光利用技術 ・粘着資材 ・非散布型農薬含有テープ ・シルバーフィルム等の反射資材 ○被覆栽培技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥の成分を換算して施肥設計する。 ・輪作を行う。 	

11 トマト（ミディトマトを含む）

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	2t/10a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	○生物農薬利用技術 ○対抗植物利用技術 ○抵抗性品種栽培・台木利用技術 ○土壌還元消毒技術 ○熱利用土壌消毒技術 ・熱水土壌消毒技術及び蒸気土壌消毒技術 ・太陽熱土壌消毒技術 ○光利用技術 ・粘着資材 ・黄色灯及び紫外線除去フィルム ・非散布型農薬含有テープ ・シルバーフィルム等の反射資材 ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥の成分を換算して施肥設計する。 ・輪作を行う。 	

12 ナス

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	2 t / 10 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	○生物農薬利用技術 ○抵抗性品種栽培・台木利用技術 ○土壌還元消毒技術 ○熱利用土壌消毒技術 ・熱水土壌消毒技術及び蒸気土壌消毒技術 ・太陽熱土壌消毒技術 ○光利用技術 ・粘着資材 ・黄色灯及び紫外線除去フィルム ・非散布型農薬含有テープ ・シルバーフィルム等の反射資材 ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	・堆きゅう肥の成分を換算して施肥設計する。	

13 ピーマン（シシトウ含む）

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	2 t / 10 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	○生物農薬利用技術 ○対抗植物利用技術 ○抵抗性品種栽培・台木利用技術 ○土壌還元消毒技術 ○熱利用土壌消毒技術 ・熱水土壌消毒技術及び蒸気土壌消毒技術 ・太陽熱土壌消毒技術 ○光利用技術 ・粘着資材 ・黄色灯及び紫外線除去フィルム ・シルバーフィルム等の反射資材 ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	・堆きゅう肥の成分を換算して施肥設計する。 ・輪作を行う。	

14 イチゴ

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	2 t / 1 0 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	○生物農薬利用技術 ○対抗植物利用技術 ○土壌還元消毒技術 ○熱利用土壌消毒技術 ・熱水土壌消毒技術及び蒸気土壌消毒技術 ・太陽熱土壌消毒技術 ○光利用技術 ・粘着資材 ・シルバーフィルム等の反射資材 ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥の成分を換算して施肥設計する。 ・輪作を行う。 	

15 一寸ソラマメ

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	2 t / 1 0 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	○生物農薬利用技術 ○光利用技術 ・粘着資材 ・シルバーフィルム等の反射資材 ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥の成分を換算して施肥設計する。 ・輪作を行う。 	

16 スイートコーン

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	2 t / 1 0 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	○機械除草技術 ○生物農薬利用技術 ○光利用技術 ・粘着資材 ・黄色灯及び紫外線除去フィルム ・シルバーフィルム等の反射資材 ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥の成分を換算して施肥設計する。 ・輪作を行う。 	

17 キャベツ

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	2 t / 1 0 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	○機械除草技術 ○生物農薬利用技術 ○対抗植物利用技術 ○抵抗性品種栽培・台木利用技術 ○光利用技術 ・粘着資材 ・黄色灯及び紫外線除去フィルム ・シルバーフィルム等の反射資材 ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥の成分を換算して施肥設計する。 ・輪作を行う。 	

18 ブロッコリー（カリフラワー含む）

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	2 t / 1 0 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	○機械除草技術 ○生物農薬利用技術 ○対抗植物利用技術 ○抵抗性品種栽培・台木利用技術 ○光利用技術 ・粘着資材 ・黄色灯及び紫外線除去フィルム ・シルバーフィルム等の反射資材 ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥の成分を換算して施肥設計する。 ・輪作を行う。 	

19 レタス

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	2 t / 1 0 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	○機械除草技術 ○生物農薬利用技術 ○対抗植物利用技術 ○抵抗性品種栽培・台木利用技術 ○光利用技術 ・粘着資材 ・黄色灯及び紫外線除去フィルム ・シルバーフィルム等の反射資材 ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥の成分を換算して施肥設計する。 ・輪作を行う。 	

20 非結球レタス

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	2 t / 10 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	○機械除草技術 ○生物農薬利用技術 ○対抗植物利用技術 ○抵抗性品種栽培・台木利用技術 ○光利用技術 ・粘着資材 ・黄色灯及び紫外線除去フィルム ・シルバーフィルム等の反射資材 ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥の成分を換算して施肥設計する。 ・輪作を行う。 	

21 ハクサイ

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	2 t / 10 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	○機械除草技術 ○生物農薬利用技術 ○対抗植物利用技術 ○抵抗性品種栽培・台木利用技術 ○光利用技術 ・粘着資材 ・黄色灯及び紫外線除去フィルム ・シルバーフィルム等の反射資材 ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥の成分を換算して施肥設計する。 ・輪作を行う。 	

22 ホウレンソウ

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	2 t / 10 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	○機械除草技術 ○生物農薬利用技術 ○抵抗性品種栽培・台木利用技術 ○熱利用土壌消毒技術 ・熱水土壌消毒技術及び蒸気土壌消毒技術 ・太陽熱土壌消毒技術 ○光利用技術 ・粘着資材 ・黄色灯及び紫外線除去フィルム ・シルバーフィルム等の反射資材 ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥の成分を換算して施肥設計する。 ・輪作を行う。 	

23 ツマミナ

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	2 t / 10 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	○機械除草技術 ○生物農薬利用技術 ○熱利用土壌消毒技術 ・熱水土壌消毒技術及び蒸気土壌消毒技術 ・太陽熱土壌消毒技術 ○光利用技術 ・粘着資材 ・黄色灯及び紫外線除去フィルム ・シルバーフィルム等の反射資材 ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥の成分を換算して施肥設計する。 ・輪作を行う。 	

24 非結球アブラナ科（コマツナ・チンゲンサイ・ミズナ・サントウサイ等）

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	2 t / 1 0 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	○機械除草技術 ○生物農薬利用技術 ○抵抗性品種栽培・台木利用技術 ○熱利用土壌消毒技術 ・熱水土壌消毒技術及び蒸気土壌消毒技術 ・太陽熱土壌消毒技術 ○光利用技術 ・粘着資材 ・黄色灯及び紫外線除去フィルム ・シルバーフィルム等の反射資材 ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥の成分を換算して施肥設計する。 ・輪作を行う。 	

25 ナバナ類（勝山ミズナ等）

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	2 t / 1 0 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	○機械除草技術 ○生物農薬利用技術 ○抵抗性品種栽培・台木利用技術 ○光利用技術 ・粘着資材 ・シルバーフィルム等の反射資材 ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥の成分を換算して施肥設計する。 ・輪作を行う。 	

26 カブ

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	2 t / 1 0 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	○機械除草技術 ○生物農薬利用技術 ○対抗植物利用技術 ○抵抗性品種栽培・台木利用技術 ○土壌還元消毒技術 ○熱利用土壌消毒技術 ・熱水土壌消毒技術及び蒸気土壌消毒技術 ・太陽熱土壌消毒技術 ○光利用技術 ・粘着資材 ・シルバーフィルム等の反射資材 ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	・堆きゅう肥の成分を換算して施肥設計する。 ・輪作を行う。	

27 ダイコン

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	2 t / 1 0 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	○機械除草技術 ○生物農薬利用技術 ○対抗植物利用技術 ○抵抗性品種栽培・台木利用技術 ○光利用技術 ・粘着資材 ・シルバーフィルム等の反射資材 ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	・堆きゅう肥の成分を換算して施肥設計する。 ・輪作を行う。	

28 ニンジン

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	2 t / 1 0 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	○機械除草技術 ○生物農薬利用技術 ○対抗植物利用技術 ○抵抗性品種栽培・台木利用技術 ○光利用技術 ・粘着資材 ・シルバーフィルム等の反射資材 ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥の成分を換算して施肥設計する。 ・輪作を行う。 	

29 カンショ

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	2 t / 1 0 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	○温湯種子消毒 ○機械除草技術 ○生物農薬利用技術 ○対抗植物利用技術 ○熱利用土壌消毒技術 ・熱水土壌消毒技術及び蒸気土壌消毒技術 ○光利用技術 ・粘着資材 ・黄色灯及び紫外線除去フィルム ・シルバーフィルム等の反射資材 ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥の成分を換算して施肥設計する。 ・輪作を行う。 	

30 サトイモ

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術	2 t / 1 0 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	○生物農薬利用技術 ○対抗植物利用技術 ○光利用技術 ・粘着資材 ・シルバーフィルム等の反射資材 ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥の成分を換算して施肥設計する。 ・輪作を行う。 	

31 サトイモ葉柄（ハッ頭）

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術	2 t / 1 0 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	○生物農薬利用技術 ○対抗植物利用技術 ○光利用技術 ・粘着資材 ・シルバーフィルム等の反射資材 ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥の成分を換算して施肥設計する。 ・輪作を行う。 	

3.2 バレイシヨ

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	2 t / 1 0 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 2 0 %
化学農薬低減技術	○機械除草技術 ○生物農薬利用技術 ○対抗植物利用技術 ○光利用技術 ・粘着資材 ・シルバーフィルム等の反射資材 ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 2 0 %
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥の成分を換算して施肥設計する。 ・輪作を行う。 	

3.3 タマネギ

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	2 t / 1 0 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 2 0 %
化学農薬低減技術	○機械除草技術 ○生物農薬利用技術 ○光利用技術 ・粘着資材 ・シルバーフィルム等の反射資材 ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 2 0 %
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥の成分を換算して施肥設計する。 	

34 ネギ

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	2 t / 1 0 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	○機械除草技術 ○生物農薬利用技術 ○熱利用土壌消毒技術 ・熱水土壌消毒技術及び蒸気土壌消毒技術 ・太陽熱土壌消毒技術 ○光利用技術 ・粘着資材 ・黄色灯及び紫外線除去フィルム ・シルバーフィルム等の反射資材 ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥の成分を換算して施肥設計する。 ・輪作を行う。 	

35 ニンニク

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	2 t / 1 0 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	○生物農薬利用技術 ○光利用技術 ・粘着資材 ・シルバーフィルム等の反射資材 ○被覆栽培技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥の成分を換算して施肥設計する。 ・輪作を行う。 	

36 ラッキョウ

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	2 t / 1 0 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	○機械除草技術 ○光利用技術 ・粘着資材 ・シルバーフィルム等の反射資材 ○被覆栽培技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	・堆きゅう肥の成分を換算して施肥設計する。	

37 ウリ類

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	2 t / 1 0 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	○生物農薬利用技術 ○対抗植物利用技術 ○光利用技術 ・粘着資材 ・シルバーフィルム等の反射資材 ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	・堆きゅう肥の成分を換算して施肥設計する。 ・輪作を行う。	

38 シュンギク

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	2 t / 1 0 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	○生物農薬利用技術 ○熱利用土壌消毒技術 ・熱水土壌消毒技術及び蒸気土壌消毒技術 ・太陽熱土壌消毒技術 ○光利用技術 ・粘着資材 ・シルバーフィルム等の反射資材 ○被覆栽培技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	・堆きゅう肥の成分を換算して施肥設計する。	

39 シソ

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	2 t / 1 0 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	○生物農薬利用技術 ○光利用技術 ・粘着資材 ・シルバーフィルム等の反射資材 ○被覆栽培技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	・堆きゅう肥の成分を換算して施肥設計する。 ・輪作を行う。	

40 ゴボウ

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	2 t / 10 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	○生物農薬利用技術 ○対抗植物利用技術 ○光利用技術 ・粘着資材 ・シルバーフィルム等の反射資材 ○被覆栽培技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	・堆きゅう肥の成分を換算して施肥設計する。 ・輪作を行う。	

41 ジネンジョ

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	2 t / 10 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	○生物農薬利用技術 ○対抗植物利用技術 ○光利用技術 ・粘着資材 ・シルバーフィルム等の反射資材 ○被覆栽培技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	・堆きゅう肥の成分を換算して施肥設計する。 ・輪作を行う。	

4 2 未成熟インゲン

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	2 t / 1 0 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 2 0 %
化学農薬低減技術	○生物農薬利用技術 ○熱利用土壌消毒技術 ・熱水土壌消毒技術及び蒸気土壌消毒技術 ・太陽熱土壌消毒技術 ○光利用技術 ・粘着資材 ・シルバーフィルム等の反射資材 ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 2 0 %
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥の成分を換算して施肥設計する。 ・輪作を行う。 	

4 3 エダマメ

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	2 t / 1 0 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 2 0 %
化学農薬低減技術	○生物農薬利用技術 ○熱利用土壌消毒技術 ・熱水土壌消毒技術及び蒸気土壌消毒技術 ・太陽熱土壌消毒技術 ○光利用技術 ・粘着資材 ・シルバーフィルム等の反射資材 ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 2 0 %
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥の成分を換算して施肥設計する。 ・輪作を行う。 	

4 4 未成熟エンドウ

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	2 t / 1 0 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 2 0 %
化学農薬低減技術	○生物農薬利用技術 ○対抗植物利用技術 ○熱利用土壌消毒技術 ・熱水土壌消毒技術及び蒸気土壌消毒技術 ・太陽熱土壌消毒技術 ○光利用技術 ・粘着資材 ・シルバーフィルム等の反射資材 ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 2 0 %
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥の成分を換算して施肥設計する。 ・輪作を行う。 	

4 5 オクラ

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	2 t / 1 0 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 2 0 %
化学農薬低減技術	○生物農薬利用技術 ○対抗植物利用技術 ○光利用技術 ・粘着資材 ・シルバーフィルム等の反射資材 ○被覆栽培技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 2 0 %
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥の成分を換算して施肥設計する。 ・輪作を行う。 	

46 食用ギク

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	2 t / 1 0 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	○生物農薬利用技術 ○被覆栽培技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥の成分を換算して施肥設計する。 ・輪作を行う。 	

47 アスパラガス

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	2 t / 1 0 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	○生物農薬利用技術 ○対抗植物利用技術 ○抵抗性品種栽培・台木利用技術 ○熱利用土壌消毒技術 <ul style="list-style-type: none"> ・熱水土壌消毒技術及び蒸気土壌消毒技術 ・太陽熱土壌消毒技術 ○光利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・粘着資材 ・黄色灯及び紫外線除去フィルム ・シルバーフィルム等の反射資材 ○フェロモン剤利用技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥の成分を換算して施肥設計する。 ・輪作を行う。 	

48 モロヘイヤ

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	2 t / 1 0 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	○機械除草技術 ○生物農薬利用技術 ○対抗植物利用技術 ○抵抗性品種栽培・台木利用技術 ○熱利用土壌消毒技術 ・熱水土壌消毒技術及び蒸気土壌消毒技術 ・太陽熱土壌消毒技術 ○光利用技術 ・黄色灯及び紫外線除去フィルム ・シルバーフィルム等の反射資材 ○フェロモン剤利用技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥の成分を換算して施肥設計する。 ・輪作を行う。 	

49 ツルムラサキ

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	2 t / 1 0 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	○機械除草技術 ○生物農薬利用技術 ○対抗植物利用技術 ○抵抗性品種栽培・台木利用技術 ○熱利用土壌消毒技術 ・熱水土壌消毒技術及び蒸気土壌消毒技術 ・太陽熱土壌消毒技術 ○光利用技術 ・黄色灯及び紫外線除去フィルム ・シルバーフィルム等の反射資材 ○フェロモン剤利用技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥の成分を換算して施肥設計する。 ・輪作を行う。 	

50 パプリカ

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	2 t / 10 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	○生物農薬利用技術 ○対抗植物利用技術 ○抵抗性品種栽培・台木利用技術 ○熱利用土壌消毒技術 ・熱水土壌消毒技術及び蒸気土壌消毒技術 ・太陽熱土壌消毒技術 ○光利用技術 ・粘着資材 ・黄色灯及び紫外線除去フィルム ・シルバーフィルム等の反射資材 ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥の成分を換算して施肥設計する。 ・輪作を行う。 	

51 ズッキーニ

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	2 t / 10 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	○生物農薬利用技術 ○対抗植物利用技術 ○抵抗性品種栽培・台木利用技術 ○熱利用土壌消毒技術 ・熱水土壌消毒技術及び蒸気土壌消毒技術 ・太陽熱土壌消毒技術 ○光利用技術 ・粘着資材 ・非散布型農薬含有テープ ・シルバーフィルム等の反射資材 ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥の成分を換算して施肥設計する。 ・輪作を行う。 	

5 2 パセリ

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	2 t / 1 0 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 2 0 %
化学農薬低減技術	○生物農薬利用技術 ○熱利用土壌消毒技術 ・熱水土壌消毒技術及び蒸気土壌消毒技術 ・太陽熱土壌消毒技術 ○光利用技術 ・粘着資材 ・黄色灯及び紫外線除去フィルム ・シルバーフィルム等の反射資材 ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 2 0 %
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥の成分を換算して施肥設計する。 ・輪作を行う。 	

5 3 バジル

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	2 t / 1 0 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 2 0 %
化学農薬低減技術	○生物農薬利用技術 ○熱利用土壌消毒技術 ・熱水土壌消毒技術及び蒸気土壌消毒技術 ・太陽熱土壌消毒技術 ○光利用技術 ・粘着資材 ・黄色灯及び紫外線除去フィルム ・シルバーフィルム等の反射資材 ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 2 0 %
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥の成分を換算して施肥設計する。 	

54 ヤーコン

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	2 t / 1 0 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	○機械除草技術 ○生物農薬利用技術 ○光利用技術 ・シルバーフィルム等の反射資材 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥の成分を換算して施肥設計する。 ・輪作を行う。 	

55 ショウガ

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	2 t / 1 0 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	○機械除草技術 ○生物農薬利用技術 ○土壌還元消毒技術 ○熱利用土壌消毒技術 ・熱水土壌消毒技術及び蒸気土壌消毒技術 ・太陽熱土壌消毒技術 ○フェロモン剤利用技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥の成分を換算して施肥設計する。 ・輪作を行う。 	

56 エンサイ（空芯菜）

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	2 t / 10 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	○機械除草技術 ○生物農薬利用技術 ○熱利用土壌消毒技術 ・熱水土壌消毒技術及び蒸気土壌消毒技術 ・太陽熱土壌消毒技術 ○光利用技術 ・粘着資材 ・黄色灯及び紫外線除去フィルム ・シルバーフィルム等の反射資材 ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥の成分を換算して施肥設計する。 ・輪作を行う。 	

(果樹)

57 ウメ（アンズ含む）

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	2 t / 10 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	○機械除草技術 ○フェロモン剤利用技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥を多量施用するときは、堆きゅう肥1t当たり窒素成分2kg減肥する。 ・緑肥作物栽培のときは基肥を10%減肥する。 ・フェロモン剤は園地がまとまっているところで一斉に使用する。 	

58 ナシ

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	2 t / 1 0 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 2 0 %
化学農薬低減技術	○機械除草技術 ○生物農薬利用技術 ○光利用技術 ・黄色灯及び紫外線除去フィルム ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 2 0 %
その他の留意事項	・堆きゅう肥を多量施用するときは、堆きゅう肥 1 t 当たり窒素成分 2 kg 減肥する。 ・緑肥作物栽培のときは基肥を 1 0 % 減肥する。	

59 カキ

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	2 t / 1 0 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 2 0 %
化学農薬低減技術	○機械除草技術 ○生物農薬利用技術 ○光利用技術 ・黄色灯及び紫外線除去フィルム ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 2 0 %
その他の留意事項	・堆きゅう肥を多量施用するときは、堆きゅう肥 1 t 当たり窒素成分 2 kg 減肥する。 ・緑肥作物栽培のときは基肥を 1 0 % 減肥する。	

60 クリ

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	2 t / 10 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	○機械除草技術 ○生物農薬利用技術 ○抵抗性品種栽培・台木利用技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥を多量施用するときは、堆きゅう肥1t当たり窒素成分2kg減肥する。 ・緑肥作物栽培のときは基肥を10%減肥する。 	

61 ブドウ

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	2 t / 10 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	○機械除草技術 ○抵抗性品種栽培・台木利用技術 ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥を多量施用するときは、堆きゅう肥1t当たり窒素成分2kg減肥する。 ・緑肥作物栽培のときは基肥を10%減肥する。 	

6.2 ミカン類

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	2 t / 10 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	○機械除草技術 ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥を多量施用するときは、堆きゅう肥1t当たり窒素成分2kg減肥する。 ・緑肥作物栽培のときは基肥を10%減肥する。 	

6.3 モモ（ネクタリン含む）

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	2 t / 10 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	○機械除草技術 ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥を多量施用するときは、堆きゅう肥1t当たり窒素成分2kg減肥する。 ・緑肥作物栽培のときは基肥を10%減肥する。 	

64 リンゴ

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	2 t / 1 0 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	○機械除草技術 ○生物農薬利用技術 ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥を多量施用するときは、堆きゅう肥1t当たり窒素成分2kg減肥する。 ・緑肥作物栽培のときは基肥を10%減肥する。 	

65 イチジク

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	2 t / 1 0 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	○機械除草技術 ○光利用技術 ・粘着資材 ・シルバーフィルム等の反射資材 ○被覆栽培技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥を多量施用するときは、堆きゅう肥1t当たり窒素成分2kg減肥する。 ・緑肥作物栽培のときは基肥を10%減肥する。 	

66 イチョウ

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	2 t / 10 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	○機械除草技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	・堆きゅう肥を多量施用するときは、堆きゅう肥1t当たり窒素成分2kg減肥する。 ・緑肥作物栽培のときは基肥を10%減肥する。	

67 キウイフルーツ

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	2 t / 10 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	○機械除草技術 ○被覆栽培技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	・堆きゅう肥を多量施用するときは、堆きゅう肥1t当たり窒素成分2kg減肥する。 ・緑肥作物栽培のときは基肥を10%減肥する。	

68 スモモ（プルーン含む）

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	2 t / 1 0 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	○機械除草技術 ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥を多量施用するときは、堆きゅう肥1t当たり窒素成分2kg減肥する。 ・緑肥作物栽培のときは基肥を10%減肥する。 	

69 ベリー類（ブルーベリー等）

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	2 t / 1 0 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	○機械除草技術 ○生物農薬利用技術 ○被覆栽培技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥の成分を換算して施肥設計する。 	

(花き)

70 キク

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	2 t / 1 0 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	○生物農薬利用技術 ○熱利用土壌消毒技術 ・熱水土壌消毒技術及び蒸気土壌消毒技術 ・太陽熱土壌消毒技術 ○光利用技術 ・粘着資材 ・黄色灯及び紫外線除去フィルム ・非散布型農薬含有テープ ・シルバーフィルム等の反射資材 ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥を行う。	

71 ユリ

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	2 t / 1 0 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	○生物農薬利用技術 ○熱利用土壌消毒技術 ・熱水土壌消毒技術及び蒸気土壌消毒技術 ・太陽熱土壌消毒技術 ○光利用技術 ・粘着資材 ・黄色灯及び紫外線除去フィルム ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥を行う。	

72 スイセン

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	2 t / 1 0 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 2 0 %
化学農薬低減技術	○機械除草技術 ○熱利用土壌消毒技術 ・太陽熱土壌消毒技術 ○光利用技術 ・粘着資材 ○被覆栽培技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 2 0 %
その他の留意事項	・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥を行う。	

73 ストック

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	2 t / 1 0 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 2 0 %
化学農薬低減技術	○生物農薬利用技術 ○熱利用土壌消毒技術 ・太陽熱土壌消毒技術 ○光利用技術 ・粘着資材 ・黄色灯及び紫外線除去フィルム ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 2 0 %
その他の留意事項	・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥を行う。	

74 トルコギキョウ

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	2 t / 1 0 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 2 0 %
化学農薬低減技術	○生物農薬利用技術 ○熱利用土壌消毒技術 ・太陽熱土壌消毒技術 ○光利用技術 ・粘着資材 ・黄色灯及び紫外線除去フィルム ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 2 0 %
その他の留意事項	・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥を行う。	

75 カーネーション

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術	3 t / 1 0 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 2 0 %
化学農薬低減技術	○生物農薬利用技術 ○熱利用土壌消毒技術 ・熱水土壌消毒技術及び蒸気土壌消毒技術 ・太陽熱土壌消毒技術 ○光利用技術 ・粘着資材 ・黄色灯及び紫外線除去フィルム ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 2 0 %
その他の留意事項	・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥を行う。	

76 宿根カスミソウ

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術	3 t / 1 0 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 2 0 %
化学農薬低減技術	○生物農薬利用技術 ○熱利用土壌消毒技術 ・太陽熱土壌消毒技術 ○光利用技術 ・粘着資材 ・黄色灯及び紫外線除去フィルム ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 2 0 %
その他の留意事項	・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥を行う。	

77 デルフィニウム

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	3 t / 1 0 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 2 0 %
化学農薬低減技術	○生物農薬利用技術 ○熱利用土壌消毒技術 ・太陽熱土壌消毒技術 ○光利用技術 ・粘着資材 ・黄色灯及び紫外線除去フィルム ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 2 0 %
その他の留意事項	・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥を行う。	

78 ラークスパー

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	3 t / 1 0 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	○生物農薬利用技術 ○熱利用土壌消毒技術 ・太陽熱土壌消毒技術 ○光利用技術 ・粘着資材 ・黄色灯及び紫外線除去フィルム ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥を行う。	

79 ウメモドキ

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術	3 t / 1 0 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	○機械除草技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥を行う。	

80 ソケイ

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術	3 t / 1 0 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	○機械除草技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥を行う。	

81 ボケ

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術	3 t / 1 0 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	○生物農薬利用技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥を行う。	

82 スターチス類

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術	3 t / 10 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	○生物農薬利用技術 ○熱利用土壌消毒技術 ・太陽熱土壌消毒技術 ○光利用技術 ・粘着資材 ・黄色灯及び紫外線除去フィルム ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥を行う。	

83 アスター

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	3 t / 10 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	○生物農薬利用技術 ○熱利用土壌消毒技術 ・太陽熱土壌消毒技術 ○光利用技術 ・粘着資材 ・黄色灯及び紫外線除去フィルム ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥を行う。	

84 キンギョソウ

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	3 t / 1 0 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	○生物農薬利用技術 ○熱利用土壌消毒技術 ・太陽熱土壌消毒技術 ○光利用技術 ・粘着資材 ・黄色灯及び紫外線除去フィルム ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥を行う。	

85 コスモス

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	3 t / 1 0 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	○生物農薬利用技術 ○熱利用土壌消毒技術 ・太陽熱土壌消毒技術 ○光利用技術 ・粘着資材 ○被覆栽培技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥を行う。	

86 ヒマワリ

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	3 t / 10 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	○生物農薬利用技術 ○熱利用土壌消毒技術 ・太陽熱土壌消毒技術 ○光利用技術 ・粘着資材 ○被覆栽培技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥を行う。	

87 シロクジャク

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術	3 t / 10 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	○熱利用土壌消毒技術 ・太陽熱土壌消毒技術 ○光利用技術 ・粘着資材 ○被覆栽培技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥を行う。	

88 シャクヤク

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術	3 t / 10 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	○温湯種子消毒 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥を行う。	

89 リヤトリス

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術	3 t / 10 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	○機械除草技術 ○生物農薬利用技術 ○熱利用土壌消毒技術 ・太陽熱土壌消毒技術 ○光利用技術 ・粘着資材 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥を行う。	

90 チューリップ

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	3 t / 1 0 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 2 0 %
化学農薬低減技術	○熱利用土壌消毒技術 ・太陽熱土壌消毒技術 ○光利用技術 ・粘着資材 ○被覆栽培技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 2 0 %
その他の留意事項	・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥を行う。	

91 フリージア

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	3 t / 1 0 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 2 0 %
化学農薬低減技術	○熱利用土壌消毒技術 ・太陽熱土壌消毒技術 ○被覆栽培技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 2 0 %
その他の留意事項	・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥を行う。	

9 2 グラジオラス

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	3 t / 1 0 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 2 0 %
化学農薬低減技術	○熱利用土壌消毒技術 ・太陽熱土壌消毒技術 ○被覆栽培技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 2 0 %
その他の留意事項	・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥を行う。	

9 3 カラー

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術	3 t / 1 0 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 2 0 %
化学農薬低減技術	○熱利用土壌消毒技術 ・太陽熱土壌消毒技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 2 0 %
その他の留意事項	・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥を行う。	

94 アリウム・ギガンチウム

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術	3 t / 1 0 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 2 0 %
化学農薬低減技術	○機械除草技術 ○生物農薬利用技術 ○熱利用土壌消毒技術 ・太陽熱土壌消毒技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 2 0 %
その他の留意事項	・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥を行う。	

95 サクラ

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術	3 t / 1 0 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 2 0 %
化学農薬低減技術	○機械除草技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 2 0 %
その他の留意事項	・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥を行う。	

96 サンゴミズキ

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術	3 t / 1 0 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	○機械除草技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥を行う。	

97 レンギョウ

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術	3 t / 1 0 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	○機械除草技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥を行う。	

98 ヤナギ類

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術	3 t / 1 0 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	○生物農薬利用技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥を行う。	

99 グニーユーカリ

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術	3 t / 1 0 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	○機械除草技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥を行う。	

100 コデマリ

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術	3 t / 10 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	○機械除草技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥を行う。	

101 ナルコユリ

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術	3 t / 10 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	○生物農薬利用技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥を行う。	

102 花ハス

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術	2 t / 10 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	○除草用動物利用技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	・堆きゅう肥の成分を換算して施肥設計する。	

(その他)

103 茶

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術	2 t / 10 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	○機械除草技術 ○生物農薬利用技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	・堆きゅう肥の成分を換算して施肥設計する。	

104 飼料用イネ

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	2 t / 10 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	○温湯種子消毒 ○機械除草技術 ○除草用動物利用技術 ○生物農薬利用技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	・堆きゅう肥の成分を換算して施肥設計する。	

105 マコモタケ

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術	2 t / 10 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	○機械除草技術 ○除草用動物利用技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	・堆きゅう肥の成分を換算して施肥設計する。	

106 杜仲茶

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術	2 t / 10 a 周年作では年1回の施用とする
化学肥料低減技術	○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	○機械除草技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	・堆きゅう肥の成分を換算して施肥設計する。	

107 エゴマ（子実）

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学肥料を低減する。
- ・地域の土壌や気象条件にあわせて、下記の表の中から1以上の技術により、化学農薬を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふん堆肥、稲ワラ堆肥等の堆肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	2 t / 10 a 周年作では年1回の施用とする 全量鋤き込み
化学肥料低減技術	○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	○機械除草技術 ○生物農薬利用技術 ○フェロモン剤利用技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬使用量 削減率 20%
その他の留意事項	・堆きゅう肥の成分を換算して施肥設計する。	

第6 導入計画の認定

導入計画の認定については、別に定める福井県持続性の高い農業生産方式の導入に関する計画認定要領によるものとする。

第7 農業改良資金融通法の特例措置

持続性の高い農業生産方式の導入の促進に関する法律施行令（平成11年政令第334号）に掲げる資金は、農業者が導入計画の認定を受けて持続性の高い農業生産方式を導入する際に必要な資金を貸し付けるものである。持続性の高い農業生産方式を導入しようとする場合には、当該生産方式が堆肥等の活用による土づくりと化学肥料・農薬の使用を減少させる技術のすべてを併せて行う生産方式であり、複数の技術の導入に対応した機械、施設等を必要とすることから、償還期間（据置期間を含む。）を10年以内から12年以内に延長することとしている。（法第6条）

第8 その他

1 援助

県では、認定農業者による認定導入計画の達成を促進するため、各農林総合事務所・嶺南振興局による導入計画の策定の指導・助言、普及指導員の巡回による技術指導等に努めるものとする。（法第8条）

2 市町村との連携

本法において、導入指針の策定、農業者が作成した導入計画の認定等は、都道府県の事務とされており、市町村の役割について特段の規定が設けられていない。これは、持続性の高い農業生産方式の内容については、技術的要素が大きく、土づくりや施肥・防除に関する専門的知見が必要となることから、各農林総合事務所・嶺南振興局の普及指導員の専門的知識と経験を活用することが最も適当であること等を踏まえたものである。

しかしながら、本法の円滑な運用を図るためには、補助事業の活用等による啓発指導、堆肥化施設等共同利用施設の整備等による農業者への支援等、市町の果たすべき役割も大きいものであることから、市町と連携が必要と考える。

3 報告の徴収・罰則

持続性の高い農業生産方式の内容は、土づくり、肥料の施用、農薬の使用に関するものであり、必ずしもその導入にあたり・農地の取得、特定の施設の整備等を伴うものではないことから、認定農業者が実際に当該生産方式を導入しているかどうかについては、外見からは明確には判断できないことも多いと考えられる。

このため、農業者の導入計画の実施状況を確実に把握することができるよう、法律第9条により知事は必要に応じて農業者から報告を求めることができる。

また、認定農業者が知事から報告を求められた場合に、報告をせず、あるいは虚偽の報告をしたりすることのないよう、報告徴収の実効性を担保するため、法律第10条により罰則の規定が設けられている。